「この人 37」　原田 曄 71歳 千葉県

編集部　滑稽俳句を始められたきっかけは？

原　田　俳句の国、伊予（愛媛県）で大学入学まで過ごしましたので、俳句には必然的に親しんでいました。実作は、父が母の看取りを始めて、俳句を詠んでは送って来ていたのに影響され、始めました。ちょうど十年前の夏頃のことです。滑稽俳句を詠もうと意識したことは無かったのですが、敢えて言えば、八木先生に「微苦笑俳壇」で選をいただいたことでしょうか。

編集部　滑稽とはどのようなものでしょうか。

原　田　「定型律、季語、切れ」の俳句形式、これは、この最短詩形を「俳諧」と言ってきたように、文字通り俳味表現に最も適した形式です。滑稽は、俳句が大切にする「おかしみ」です。飯島晴子の「おかしみはやさしさであり、ゆとりであり、批評であり、人間の精神にとって酸素のようなもの」という言葉が頭に残っています。

編集部　滑稽俳句をつくるコツは何でしょうか。

原　田　滑稽俳句を詠もうと意識していないと、先ほど言いましたが、私にはこれが俳句そのもの。まずは、よく「視る」ことに尽きると思います。視るほど可笑しく、見抜けた時の句が可笑しい。

編集部　なるほど、大変、勉強になりました。

＜代表句＞

大根も足も見えをり厨口
はためいてくしゃくしゃになる「氷」かな
三分を律儀に待ちて晦日蕎麦
ねこ少しずらし窓辺に日向ぼこ
三寒のときに四温を省きたる

滑稽俳句協会ホームページに掲載の記事・写真・イラストなど、
すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。